（新釈）いなばの白うさぎ

藤　鈴蝸

むかしむかしのいなばの国のお話です。

いなばの国の海のはるかおきに、小さな小さな島がうかんでいました。白うさぎが一ぴき、島の海がんにこしをかけて、遠くいなばの国をながめていました。

「ああ、はやくあの森にかえりたいなあ。」

白うさぎはもとはいなばの国の森に住んでいました。おいしい草がたくさん生えて、うさぎのなかまたちもたくさんいました。ちえのある白うさぎはいつもにんきもので、多くのともだちにかこまれて、たのしくへいわにくらしていました。

ところがある日のこと、

「きゃー」

大きな大きななみがとつぜんおしよせてきました。白うさぎはたちまちのうちにこのおきの島までながされてしまったのです。

「こまったなあ。どうしよう。ぼくはあんな遠くまで泳げないよ。」

そこへ、たくさんのワニザメたちが、ワイワイザブザブ、たのしそうに泳いでやってきました。

「そうだ、いいことを思いついたぞ。」

白うさぎは、なかでも一番強そうなワニザメに声をかけました。

「ワニザメさん、こんにちは。」

「おや、うさぎかい。こんなところにうさぎがいるとは。」

「ワニザメさんて、強そうですね。」

「そうだろう。おれたちワニザメは、ここらあたりじゃ一番だからね。」
「すごいなあ、ぼくたちうさぎはワニザメさんたちにはとてもかなわないですね。」
「ははは、そりゃそうさ。」
「ぼくたちうさぎは、いっぴきずつじゃとてもワニザメさんたちにはかないません。でもね、なかまの数じゃぼくたちうさぎの方が多いでしょうね。」
「何を言うんだ。おれたちワニザメのなかまはたくさんいるんだぞ。」
「いえいえ、ワニザメさん、ぼくたちうさぎのなかまはワニザメさんたちの十ばいはいますよ。」
「いいかげなことを言うな、おれたちワニザメがここらあたりじゃ一番なんだぞ。なかまの数もおれたちが一番にきまっているじゃないか。」
「それじゃあ、ワニザメさんのなかまは何びきいるんですか。」
「いや、それは・・・」
「ぼくが数えてあげますよ。それでなかまの数をくらべてみましょう。」
「こんな海の中でどうやって数を数えるんだ。」
「ワニザメさんのなかまを集めてもらって、ぼくの足もとからむこうぎしまで、ずらっとならんでみてください。あ、でも」
「なんだ。」
「いくらワニザメさんがなかまをあつめても、むこうぎしまではとどかないか。」

「ばかなことを言うな。それぐらいの数はおれの一声ですぐにあつまる。」
「さすがだなあ。それではそのせなかをぼくが歩いて数を数えます。」
「よし、わかった。」
ワニザメはなかまをあつめて、おきの島からいなばの海がんまで、一れつにならびました。それはまるではしがかかったようでした。
「一ぴき、二ひき、三びき、四ひき・・・」
白うさぎは大きな声で数えながらワニザメの上をピョンピョンはねて、海をわたっていきました。
あまりにもうまくいったので、白うさぎはゆかいでゆかいでたまりませんでした。
あんなにこわいワニザメが、今は自分の足の下でおとなしくならんでいるではありませんか。
あんなにえらそうにしていたワニザメが、気づかれないようにとコソコソと、数え終わったあとにもういちど、白うさぎの前にならびなおしているではありませんか。
ワニザメたちは白うさぎのたくらみなんか、ほんの少しも気づいていないようです。
「ぼくってなんてすばらしいちえをもっているんだろう。」
白うさぎはじまんしたくてじまんしたくてたまらなくなりました。
そして、もくひょうまであといっぽ、さいごのワニザメのせなかにのったとき、とうとう

「ワニザメさん、うまくだまされたね。ぼくははじめからこちらにわたりたかっただけなんだよ。」
と言ってしまったのでした。
「何だと。」
おこったワニザメは、白うさぎをつかまえて、するどいきばでかみつき、たちまちけがわをはいで、白うさぎをまるはだかにしてしまいました。

けがわをはがれた白うさぎは、あまりのいたさになきながら、そのばにうずくまっていました。
そこへ、『やそがみさま』とよばれる八十人の神様たちが、ワイワイガヤガヤ、たのしそうに歩いてやって来られました。
白うさぎのすがたに気づかれたやそがみさまたちは、そのわけをたずねました。
白うさぎはこれまでのできごとをお話しました。そして、
「ぼくはただ生まれた森にかえりたかっただけなんです。それなのにワニザメたちにこんなひどい目にあわされるなんて。ああ、もういたくていたくて、何もできません。」
するとやそがみさまは、
「それでは海の水につかって、それから風にふかれて、お日様の光をよくあびるとよい。」
とおしえて下さいました。
「ああ、ありがとうございます。」
白うさぎはおしえられたとおりにしてみました。
するとどうでしょう。いたみはますますはげしくなるばかり。

みうごき一つできなくなってしまいました。白うさぎはうずくまったまま、体をふるわせてなくことしかできませんでした。

そこへ、大きなふくろをかついだかたがとおりかかりました。
白うさぎのすがたに気づかれたその方は、わけをたずねました。
白うさぎはこれまでのできごとをお話しました。そして、
「ぼくが悪かったんです。ワニザメさんたちをだましたぼくが悪かったんです。」
すると大きなふくろをかついだかたは、
「それではま水でからだをきよめなさい。そしてそこに生えているガマのほをとってじめんにしき、その上にねころがりなさい。そうすればお前の体はもとのとおりなりますよ。」
とおしえて下さいました。
「ああ、ありがとうございます。」
白うさぎはおしえられたとおりにしてみました。
するとどうでしょう。いたみはみるみるおさまっていき、そればかりか白い毛も生えてきて、白うさぎはもとのすがたにもどったのです。

大きなふくろをかついだかたは、白うさぎのようすをやさしくみまもっていて下さいました。
やっとひといきついた白うさぎはおれいを言いました。
「ありがとうございます。おかげさまですっかりよくなりました。」
「よかったね、うさぎさん。もうこれからは人をだますような

ことをしてはいけませんよ。」
「はい。」
「こまったときはちえをしぼらなくてはなりません。でも良いことは良いこと。悪いことは悪いことです。どうしても良いちえがうかばなければ、神様においのりするのです。そうすればかならず良いちえがいただけますよ。」
「はい、わかりました。」
やさしくうなずいて立ちさろうとするそのかたに、白うさぎは声をかけました。
「あなたはどのようなおかたですか。それにどうしてそのような大きなふくろをかついでいるのですか。」
「わたしのなまえは『おおくにぬしのみこと』です。」
そして大きなふくろのわけをお話下さいました。
じつは先に歩いていたやそがみさまはみんなおおくにぬしのみことのお兄さまでした。
あるとき、『やがみひめ』というそれはそれは美しいひめ神様がいらっしゃるという話がつたわってきました。お兄さまがたはみんなやがみひめさまをおよめさまにしたいと考えました。そこでみんなでそろってやがみひめさまに会いに行くことにしたのです。
長い長いたびになります。八十人分の食べ物と着がえ、なべやかままでいれて、たいへんな荷物になります。どのようにして運ぼうかとお兄さま方はそうだんされました。
やそがみさまがたは、それぞれに荷物があったのです。弓矢の上手なかたはそのうでまえをやがみひめさまにおみせするためのりっぱな弓矢を。おしゃれなかたはいろとりどりのお着物を。う

たの上手なかたはさまざまのがっきを。お金持ちのかたはたくさんのおくりものを。やがみひめさまをおよめさんにするために、みんなご自分のじまんのものを持っていきたいと考えていたのです。

そこでおおくにぬしのみことさまは「みなさんそれぞれにお持ちになるものがあるのですから、そのほかにこんな大きな荷物をもって歩かれるのはたいへんでしょう。わたしには何ももっていくものはありませんから。」と、すべてをまとめて大きなふくろに入れて、かたにかついで歩くことにしたのです。おおくにぬしのみことさまは、人のくろうをみるとだまってはおられず、自分からすすんでくろうをひきうけるるかたでした。

「おおくにぬしのみことさま。」

「何ですか。」

「やがみひめさまはおおくにぬしのみことさまとごけっこんされます。」

「おやおや。」

「ぼくがそうおいのりします。」

「それはありがたいことです。人の幸せのためのいのりは一番かないやすいのです。そして『ことだま』といって、ことばには力があって、そのとおりになるものなのです。」

「どうぞお幸せに。そしてこれからもたくさんのかたをおすくい下さい。」

「ありがとう。」

おおくにぬしのみことさまはやさしくほほえまれて、ふたたび

大きなふくろをかたにかついで、ちから強い足どりで道をすすまれました。

そののち、白うさぎの『ことだま』どおり、おおくにぬしのみことさまはやがみひめさまとごけっこんされました。

そして、さまざまなごくろうののち、人びとが幸せにくらす、りっぱな国をお作りになられたのです。それがわたしたちの日本の国のもとになったのでした。